

2012年4月19日

# 課題研究承認及び研究委員会設置申請書

大学教育学会会長

小笠原正明殿

佐藤浩章（愛媛大学）

以下の要領に基づき、研究委員会の設置を申請いたします。

## 記

- (1) 課題研究の名称：「FDの実践的課題解決のための重層的アプローチ」
- (2) 研究委員会の名称：「FDの実践的課題解決のための重層的アプローチ委員会」
- (3) 研究代表者：○佐藤浩章（愛媛大学）
- (4) 研究組織（○は学会理事、いずれも個人会員）
  - ミクロ FD 担当 加藤かおり（新潟大学） ○近田政博（名古屋大学）
  - ミドル FD 担当 沖裕貴（立命館大学）、山田剛史（愛媛大学）
  - マクロ FD 担当 井上史子（帝京大学）、山内尚子（京都産業大学）
- (5) 研究期間：平成24年度～26年度
- (6) 課題研究の目的及び研究委員会設置の事由

本課題研究の目的は、日本の高等教育機関の現場で生起している様々なFDの課題を、実践的に解決するための重層的なアプローチを提起しようとするものである。具体的には、FDに関わる研究・開発・実践・普及といった場面で起こる諸課題を三層のアプローチで、解決しようとするものである。

教育現場の諸課題を、FDを通して実践的に解決したいというニーズは益々高まっているが、これに応答することは、FDという言葉を日本社会に紹介し、普及につとめてきた我が学会に求められている喫緊の社会的使命である。本研究を通して、各大学で実践されているFDが実質化されると同時に、FD担当者の負荷が軽減され、学生の深い学びが促進されることに貢献したい。

本研究課題に関しては、先行する委員会として「Faculty Developmentの研究（1985-1997）」「FD活動の具体的展開（1997-）」「FDのダイナミクス-第一次調査のフォローアップと新たなモデル-（2006-2008）」が設置され、これまで多くの研究成果を生み出してきた。これらの中では、FDの概念が盛んに論じられてきた。これは高等教育界ならびに社会に対する啓発・普及という点で多大な貢献があったが、現場の具体的な課題解決への有用性という点で限界があったことは否めない。本研究はこれら先行研究の知見を継承し、現場で応用可能な実践知として開花させることを意図している。

本研究の主要メンバーは、大学教育センター等における専任のFD担当者としてこれまで研究・開発・実践・普及に関与してきた。また、過去に本学会において下記の複数の関連ラウンドテーブルに関与しており、専門性、経験ともに本研究を引き受けるのに相応しい。本研究には、次世代の大学教育研究者のネットワーク構築という目的もある。過去の関連ラウンドテーブルやシンポジウムの内容を、授業改善（ミクロ・レベルのFD）、カリキュラム・プログラム改革（ミドル・レベルのFD）、組織開発（マクロ・レベルのFD）の三層で分類すると、下記のようなになる。

①授業改善（マイクロ・レベルのFD）

- ◆ RT「FDのダイナミクス（その2）」（第29回大会、2007）
- ◆ RT「ライティング教育を基点にした学習支援とFD活動の展開」（第31回大会、2009）
- ◆ RT「学生の理解を深める教授学習（deep approach）」（第33回大会、2011）
- ◆ RT「授業コンサルテーションの現状と可能性」（第33回大会、2011）
- ◆ RT「FDプログラムの開発を支援する～『新任教員FDのための基準枠組』をツールとして」（第31回大会、2009）

②カリキュラム・プログラム改革（ミドル・レベルのFD）

- ◆ RT「初年次教育の今を考える」（第30回大会、2008）
- ◆ シンポジウム「大学教育における質保証の実践的展開とその意味」（第33回大会、2011）

③組織開発（マクロ・レベルのFD）

- ◆ RT「FDを担当する人・組織に求められるもの：資質か専門性か」（第29回大会、2007）
- ◆ RT「大学院教育と大学教員養成」（第29回大会、2007）
- ◆ RT「FDネットワークの可能性をさぐる」（第30回大会、2008）
- ◆ RT「高等教育開発の課題と組織化」（第32回大会、2010）
- ◆ RT「教育改革促進のための大学経営陣のリーダーシップ形成と研修プログラム」（第33回大会、2011）」

研究計画であるが、三層の課題を3年間平行して進めていくが、特に1年目は、授業改善に焦点を当て、新任教員研修、授業アンケート、公開授業、授業コンサルティング、論文・研究指導支援、高等教育教授資格等の実践的課題解決のためのマイクロ・レベルでのアプローチを模索する。2年目は、カリキュラム・プログラム改革に焦点を当て、カリキュラム診断、3つのポリシー策定、カリキュラム・アセスメント等の実践的課題解決のためのミドル・レベルでのアプローチを模索する。3年目は、主に組織開発に焦点を当て、教育・学習に焦点をあてた組織開発・組織学習、アカデミック・リーダーシップ開発、FD担当組織づくり、国内外のFDネットワーク構築等の実践的課題解決のためのマクロ・レベルでのアプローチを模索する。

一方で、三層のアプローチを統合していくフレームワーク構築もあわせておこない、各層が分断されない、重層的なアプローチによる、ホリスティックなFD論を提起したい。

(7) 研究経費：40万円×3年＝120万円

(8) 研究成果の公表方法：

いずれの年度においても、大会における関連テーマでのラウンドテーブル開催、課題研究集会における発表を行いたい。単なる研究成果発表のみならず、参加者を巻き込んだワークショップ形式の発表も積極的に取り入れ、現場におけるFD活動促進に貢献したい。発表内容は、大学教育学会誌においても課題研究論文として投稿する。最終年度には上記成果を基にして、現場で役立つFDガイドブックを出版し、広く高等教育界、社会に情報を発信し、我が学会の存在意義をアピールしたい。

以上